

分配

島崎藤村

青空文庫

四人もある私の子供の中で、亡なくなつた母かあさんを覚えているものは一人ひとりもない。ただいちばん上の子供だけが、わずかに母さんを覚えてゐる。それもほんの子供心に。ようやくあの太郎が六歳ぐらいの時分の幼い記憶で。

母さんを記念するものも、だんだんすくなくなつて、今は形見かたみの着物一枚残っていない。古い鏡台古い箆たんす、そういう道具の類ばかりはそれでも長くあつて、毎朝私の家の末子すえこが髪をとかしに行くのもその鏡の前であるが、長い年月と共に、いろいろな思い出すらも薄らいで来た。

あの母さんの時代も、そんなに遠い過去になった。それもその

はずである。太郎や次郎はもとより、三郎までもめきめきとおとなびて来て、縞しまの荒い飛白かすりの筒袖つつそでなどは着せて置かれなくなつたくらいであるから。

目に見えて四人の子供には金もかかるようになった。

「お前たちはもらうことばかり知っていて、くれることを知ってるのかい。」

私はよくこんな冗談を言つて、子供らを困らせることがある。

子供、子供と私は言うが、太郎や次郎はすでに郷里の農村のほうで思い思いに働いているし、三郎はまた三郎で、新しい友だち仲間仲間の結びつきができて、思う道へと踏み出そうとしていた。それには友だちの一人と十五円ずつも出し合い、三十円ばかりの家を

郊外のほうに借りて、自炊生活を始めたいと言い出した。敷金しきぎん

だけでも六十円はかかる。最初その相談が三郎からあつた時に、

私にはそれがお伽とぎばなし噺ばなしのようにしか思われなかつた。

私は言つた。

「とうさんも若い時分に自炊をした経験がある。しまいには三度三度煮豆で飯を食うようになった。自炊もめんどうなものだぞ。

お前たちにそれが続けられるかしら。」

私としては、もつとこの子を自分の手もとに置いて、できるだけしたくを長くさせ、窮屈な思いを忍んでもらいたかつたが、しかしこういう日のいつかやって来るだろうとは自分の予期していたことでもある。それがすこし早くやって来たというまでだ。そ

れに気質の合わないことが次第によくわかつて来た兄きょうだい妹いをこんな狭い巢のようなところに無理に一緒に置くことの弊害をも考えた。何も試みだ、とそう考えた。私は三郎ぐらいの年ごろに小さな生活を始めようとした自分の若かった日のことを思い出して現に私から離れて行こうとしている三郎の心をいじらしくも思った。

この三郎を郊外のほうへ送り出すために、私たちの家では半分引越しののような騒ぎをした。三郎の好みで、二枚の座ぶとんの更紗さらしや模様も明るい色のを造らせた。役に立つか立たないかしれないような古い椅子いすや古い時計の家にあつたのも分けた。持たせてやるものも、ないよりはまだましだぐらいの道具ばかり、それで

も集めて、荷物にして見れば、洗濯せんたくしたふとんから何からでは、おりから白く町々を埋めうずた春先の雪の路みちを一台の自動車自動車で運ぶほどであった。

その時になつて見ると、三人の兄きょうだい弟の子供は順に私から離れて行つて、末子ひとり一人だけが私のそばに残つた。三郎を送り出してからは、にわかぽあに私たちの家もひっそりとして、食卓もさびしかつた。私は娘と婆ばあやを相手に日を暮らすようになったが、次第に私の生活は変わつて行くように見えた。巢はちから分かれる蜂はちのよううに、いずれ末子も兄たちのあとを追つて、私から離れて行く日が来る。これはもはや、時の問題であるように見えた。私は年老

いて孤独な自分の姿を想像で胸に浮かべるようになった。

しかし、これはむしろ私の望むところであつた。私か、私は三十年一日のような著作生活を送つて来たものに過ぎない。世には七十いくつの晩年になつて、まだ生活を単純にすることを考え、家からも妻子からでもいいさいの財産からものがれ、全くの一人となろうとした人もあつたと聞くが、早く妻を先立てた私はそれと反対に、自分は家にとどまりながら成長する子供を順に送り出して、だんだん一人になるような道を歩いて来た。

私の周囲へはすでに幾度か死が訪れて来た。最近にもまた本郷の若い甥の一人がにわかおいに腎臓炎で亡なくなったという通知を受けた。ちょうど、私の家では次郎が徴兵適齢に当たつて、本籍

地の東京で検査を受けるために郷里のほうから出て来ていた時であつた。次郎も兄の農家を助けながら描かいたという幾枚かの習作の油絵を提さげて出て来たが、元氣も相変わらずだ。亡くなつた本郷の甥とは同おない年どし齡にも当たると、それに幼い時分の遊び友だちでもあつたので、その告別式には次郎が出かけて行くことになつた。

「若くて死ぬのはいちばんかわいそうだね。」

と、私は言つて、新しい仏への菓子折りなぞを取り寄せた。私はまた、次郎や末子の見ているところまでこころざしばかりの金を包み、黒い水引きを掛けながら、

「いくら不景氣の世の中でも、二円の香こう奠でんは包めなくなつた。

お前たちのかあさんが達者たっしやでいた時分には、二円も包めばそれでよかつたものだよ。」

と言つてみせた。

次郎はもはや父の代理もできるといふ改まつた顔つきで出かけて行つた。日ごろ人なつくく物に感じやすい次郎がその告別式から引き返して来た時は、本郷の親戚しんせきの家のほうに集まつていた知る知らぬ人々、青山からだれとだれ、新宿からだれというふうに、旧知のものが並んですわつているところで、ある見知らぬ婦人から思いがけなく声を掛けられたという話を持つて帰つて来た。

「どなたでございますか。」

「いやな次郎ちゃん、わたしを忘れちまつたの？」

これは二人の人の挨拶あいさつのように聞こえるが、次郎は一人ひとりでそれを私たちにやって見せた。

「いやな次郎ちゃん——だとサ。」

と、また次郎が妹に、その婦人の口まねをして見せた。それを聞くと、末子はからだもろとも投げ出すような娘らしい声を出して、そこへ笑いこぼれた。

どうしてその婦人のことが、こんなに私たちの間にうわさに上のぼったかというに、十八年も前に亡なくなった私の甥おいの一人の配偶つれあいで、私の子供たちから言えば母かあさんの友だちであつたからで。かすみさんといって、あの甥つちやの達たっしや者な時分には親しくした人だ。あの甥つちやは土屋つちやという家に嫁とついだ私の実の姉ひとりむすこの一人息子にあつて

いて、年も私とは三つしか違わなかつた。甥というよりは、弟に近かつた。それに、次郎や末子の生まれた家と、土屋の甥のしばらく住んでいた家とは、歩いて通えるほど近い同じ隅田川のほとりにあつたから、そんな関係から言つても以前にはよく往来した間からである。次郎のちいさな時分には、かつみさんも母さんのところへよく遊びに来て、長火鉢ながひばちのそばで話し込んだものである。この母さんの友だちですら、次郎が今あつて見てはわからないくらいになつてしまった。

間もなくかつみさんは青山の姪めいと連れだつて、私の家へ訪ねて来た。私がこの旧知の女の客を迎えるのは十七年ぶりにもなる。

あまりに久しぶりで、の対面で、私はかつみさんの顔を見つめるともなく見つめて、言葉も容易には口に出せなかった。私たちは互いに顔の形からして変わっていた。

かつみさんも今では土屋でなしに、他の姓を名乗っている人だ。結婚は二度とも不幸に終わって、今は三度目の家庭に落ちついていると聞く人だ。この薄命な、しかしねばり強い人が、どれほどのこの世の辛酸しんさんを経たあとで、今の静かな生活にはいったか、私もそうくわしいことを知らない。かつみさんは、私の子供たちを見に来たいと思いつながら今までそのおりもなかったこと、ようやく青山の姪めいに連れられて来たことなどを私に話した。

「次郎ちゃんたちのかあさんが今まで達者でいたら、幾つになつ

ていましょう。」

私がこんなことを言い出したのは、あの母さんとかつみさんといくつも年の違わなかったことを覚えているからで。

「おぼ叔母さんですか。ことしで、ちようどにおなりのはずですよ。」
かつみさんの口から出て来る話は、昔ながらの「おじ叔父さん、おば叔母さん」だ。その時、青山の姪はかつみさんの「ちようど」を聞きとがめて、

「ちようどと言いますと——」

「五十ですよ。」

この「五十」が私を驚かした。私は自分の年とつたことも忘れて、あの母さんがきようまでぴんぴんしているとしたら、もうそ

んな婆ばあさんか、と想おもつてみた。

母さんの旧ふるい友だちが十七年ぶりで私たちの家へ訪たずねて来たというは、次郎に取つても心の驚きであつたらしい。次郎は今さらのように、亡なくなつた母さんをさがすかの面おも持もちで、しきりに私たちの話に耳を傾けていた。私が自分の部へ屋やを片づけ、狭い四畳半のまん中に小さな机を持ち出し、平素めつたに取り出したことのないフランスみやげの茶卓掛けなどをその上にかけて、その水色の織り模様だけでも部屋の内を楽しくして珍客をもてなそうとしたころは、末子も学校のほうから帰つて来た。末子は女学生風の校服のまま青山の姪のうしろへ来て静かにすわつた。いくらかきまりわるげに、初めてあう客に挨あい拶さつした。

「これが末ちゃんですか。」と、かつみさんは涙ぐまないばかりのなつかしそうな調子で言った。「まあ、叔母さんにそっくりですこと。」

「どうです、私の子供も大きくなりましたろう。」

「ほんとに。あの叔母さんがお達者でいらしって、今の末ちゃんたちを御覧なすったら、どんなでしょう。」

土屋の甥おいの亡なくなつたは、私の子供らの母さんが亡くなつたのと同じ年にあたる。あの母さんが三十三、甥が三十七で没した。かつみさんの前ではあつたが、つい私は甥のことなぞを言い出した。

「妙なものですね。三十台で亡くなつた人は、いつまでも三十台

でいるような気がしますね。その人が五十いくつになるとは、どうしても思われませんね。」

「でも、叔父さん、早く亡くなつたものがいちばんつまりませんよ。長く生きていれば、こうしてまた叔父さんにお目にかかれるような日もまいりますもの。」

その日はこんな話が尽きなかつた。

私の五十六という年もむなしく過ぎて行きかけていた。かつみさんのような人が訪ねて来てくれてもあの土屋の甥や子供らの母さんが達者でいたころのようには話せなかつた。ただただ私たちはそういう昔もあつたことを考えて、互いに遠く来たことも思つた。

不景氣、不景氣と言いながら、諸物価はそう下がりそうにもないところで、私の住む谷間のような町には毎日のように太鼓の音が起こった。何々教とやらの分社のような家から起こって来るもので、冷たい不景氣の風が吹き回せば回すほど、その音は高く響けて来た。欲と、迷信と、生活難とから、拝んでもらいに行く人たちも多いという。その太鼓の音は窪い谷間くぼの町の空気に響けて、私の部屋へやの障子しょうじにまで伝わって来ていた。

私たちの家の入り口へ来て立つような貧困者も多くなった。きのうは一人ひとり来た。きようは二人ふたり来たというふうに、困って来る人がどれほどあるかしれない。震災後は働きたいにも仕事がないと

言つて救いを求めるもの、私たちの家へ来るまでに二日も食わなかつたというもの、そういう人たちを見るたびに私は自分の腰に巻きつけた帯の間から蝦蟇口がまぐちを取り出して金を分けることもあり、自分の部屋の押入れから古本を取り出して来て持たせてやることもある。中にはそういう物乞いものごに慣れ、逆に社会の不合理的を訴え、やる瀬のない憤りを残して置いて行くような人々も少なくない。

私は自分に都合のできるだけの金をそういう人々の前に置き、「まっこと困つたら、来たまえ。」

と、よく言い添えた。そして、それらの人々が帰つて行つたあとで、年も若く見たところも丈夫そうな若者が、私ごと私ごとき病弱な、しかも年とつたものところへ救いを求めに来るような、その社

会の矛盾に苦しんだ。正義が顕れて、大きな盗賊やみじめな物乞いが出た。

私たちの家の婆ばあやは、そういう時の私の態度を見ると、いつでも憤慨した。毎月働いても十八円の給金にしかならないと言いたげなこの婆やは、見ず知らずの若者が私のところから持つて行く一円、二円の金を見のがさなかつた。

そういう私たちの家では、明日あすの米もないような日がこれまでなかつたというまでで、そう余裕のある生活を送つて来たわけではない。子供らが大きくなればなるほど金がかかつて来て、まだ太郎の家のほうは毎月三十円ずつ助すけているし、太郎の家で使っている婆さんの給金も私のほうから払っているし、三郎が郊外に

自炊生活を始めてからは、そちらのほうにも毎月六十円はかかった。次郎や末子というものも控えていた。私も骨が折れる。でも、私は子供らと一緒に働くことを楽しみにして、どんなに離れて暮らしていても、その考えだけは一日も私の念頭を去らなかつた。

思いもよらない収入のある話が、この私の前に提供されるようになった。

私たちの著作を叢そうしょ書の形に集めて、予約でそれを出版するこ
とは、これまでとても書肆しよしによつて企てられないではなかつた。
ある社で計画した今度の新しい叢書は著作者の顔触れも広く取り
入れているもので、その中には私の先輩の名も見え、私の友だち

の名も見えるが、菊版三段組み、六号活字、総振り仮名付きで、一冊三四百ページもあるものを思い切った安い定価で予約応募者にわかとうというのであった。私たちはその特筆大書した定価の文字を新聞紙上の広告欄にも、書籍小売店の軒先にも、市中を練り歩く広告夫の背中にもまで見つけた。この思い切った宣伝が廉価出版の氣勢を添えて、最初の計画ではせいぜい二三万のものだろうと言われていたのが、いよいよ蓋ふたをあけて見るとその十倍もの意外に多数な読者がつくことになった。

思いもよらない収入のある話と私が言ったのは、この大量生産の結果で、各著作者の所得をなるべく平均にするために、一割二分の約束の印税の中から社預かりの分を差し引いても、およそ二

万円あまりの金が私の手にはいるはずであった。細い筆を力に四人の子供らを養つて来た私に取つて、今までそんなにまとまつて持つてみたこともない金である。

まだ私は受け取りもしないうちから、その金のことを考えるようになった。私たちの家では人を頼んで検印を押すだけに十日もかかった。今度の出版の計画が次第に実現されて行くことを私の子供らもよく知っていた。しかしそんなまとまつた金がふところにはいるということ、私は次郎にも末子にも知らせずに置いた。私は、「財は盗みである」というあの古い言葉を思い出しながら、庭にむいた自分の部屋へやの障子に近く行つた。四月も半ばを過ぎたところで、狭い庭へも春が来ていた。

私は自分で自分に尋ねてみた。

「これは盗みだろうか。」

それには私は、否いなと答えたかった。過ぐる三十年が二度と私の生しょうがい涯がいに来ないように、あの叢書そうしょに入れるはずの私の著作も二つとは私にないものである。長い労苦と努力とから生まれて来たものとして、髪も白さを増すばかりのような私の年ごろに、受けてやましい報酬であるとは思われなかった。

しかし、私も年をとったものだ。少年の時分から私は割合に金銭に淡泊なほうで、余分なものをたくわえようとするような、そういう考えをきょうまで起こした覚えもない。今度という今度は、それが私に起こって来た。私もやっぱり、金でもたくわえて置い

て、余生を安く送ろうとするような年ごろに達したのかもしれない。日あたりも悪く、風通しも悪く、午後の四時というしたと階下に
ある冬の障子はもう薄暗くなって、夏はまた二階に照りつける西
日も耐えがたいこんな谷の中の借家にくすぶっているよりか、自
分の好きな家でも建て、静かに病後の身を養いたいと考えるよう
な、そういう年ごろに達したのかもしれない。

今でこそあまり往来ゆききもしなくなつて、年始状のやり取りぐら
いな交際に過ぎないが、私の旧ふるい知人の中に一人ひとりの美術家がある。
私はその美術家の苦しい骨の折れた時代をよく知っているが、い
つのまにか人もうらやむような大きな邸やしきを構え住むようになった。
昔を知る私にはそれが不思議なくらいに思えて、あのわびしさを

友としていたような人はどこへ行つたろう、とそれを長い間の疑問として残していた。年をとつてみて、私も他人の心を読むようになった。あれはただ裕福な人の邸ではなくて、若い時分に人一倍貧苦をなめ尽くした人の住む家だと気がついた。

次郎や、末子をそばに置いて、私は若いさかりの子供らが知らない貯蓄の誘惑に気を腐らした。あるところにはあり過ぎるような金から見たら、おそらく二万円ぐらいはなんでもないかもしれない。しかし、ないところにはなさ過ぎる金から見たら、それだけまとまった高でも大きい。でも、私は、土の中へでも埋^{うづ}めて置くように、死に金をしまつて置く気はなかつた。どうそれを使つたものかと思つた。

どの時代を思い出してみても、私にはそう楽らくなという日もない。ずっと以前に、私は著作のしたくをするつもりで、三年ばかり山の上に全く黙って暮らしたこともある。私もすでに結婚してから三年目で、家のものなぞはそろそろ単調な田舎いなか生活に飽いて来て、こんなことでいつ芽が出るかという顔つきであったし、それに私たちの家ではあの山の上だからやって行けたと思うほどの切り詰めた暮らしをしていたから、そういう不自由さとも戦わねばならなかったし、毎年十一月から翌年の三月へかけて五か月もの長い冬とも戦わねばならなかった。一度降ったら春まで溶けずにある雪の積もりに積もった庭に向いた部屋へやで、寒さのために凍しもみ裂け

る恐ろしげな家の柱の音などを聞きながら、夜おそくまでひとり
で机にむかっていた時の心持ちは忘れられない。でも、私はあの
山の上から東京へ出て来て見るたびに、とにもかくにも出版業者
がそれぞれの店を構え、店員を使つて、相応な生計を営んで行く
のにその原料を提供する著作者が——少数の例外はあるにもせよ
——食うや食わずにいる法はないと考えた。私が全くの著作生活
に移ろうとしたのも、そのころからであつた。

私の目にはまだ、六畳に二畳の二階が残っている。壁がある。
障子がある。ごちやごちやとした町中の往来を隔てて、魚を並べ
た肴屋さかなやの店がその障子の外に見おろされる。向かい隣には、白
い障子のはまつた下町したまち風の窓も見える。そこは私がああの上

から二度目に越して行つた家の二階で、都会の空気も濃いところだ。かつみさん夫婦がかわるがわる訪ねて来て、よく登つて来たのもその二階だ。そこに私は机を置いて、また著作にふけたが、そのころに私の書いたものが子供らの母さんの女学校時代の友だちのうわさにも上つたかして、そういう昔なじみの家庭を見に行つて帰つて来るたびに、いろいろ友だちから冷やかされたことだの、「お富さん（子供らの母さん）もずいぶん人がいい、あんなことを書かれて、黙っている細君があるものか。」と言われたことだの、それをあの母さんが私に話してみせた。でも、そういう人は私の書いたものが古い友だちのうわさに上るといふだけにも満足して、にわかにな自分の夫を見直すような顔つきであつたには、

私も苦笑せずにはいられなかった。そのころの私が自分の周囲に見いだす著作者たちとは言えば、そのいずれもが新聞社に關係するとか、学校にきょうべん教鞭けんを執るとか、あるいは雑誌の編集にたずさわるとかして、私のように著作一方で立とうとしているのもめずらしいと言われた。私はよくそう思った。これはまだ著作で家族を養えるような時代ではないのだと。私もやせ我慢にやせ我慢を重ねていたが、親子四人に女中ひとりを一人置いて、毎月六七十円的生活費を産み出すにすら骨が折れた。そのころの私たちは十六円の家賃の家でしんぼう辛抱したが、それすら高過ぎると思つたくらいだ。三年の外国の旅も、私のしょうがい生涯せいの中でのさびしい時であつたような気がする。もつとも、その間には、これまで踏んだことの

ない土を踏み、交わったことのない人にも交わってみ、陰もあり日向もあるのだからその複雑な気持ちはちよつと言葉には尽くせない。ひなた 実に無造作に、私はあの旅に上のぼつて行つた。その無造作は、自分の書齋を外国の町に移すぐらいの考えでいた。全く知らない土地に身を置いて見ると、とかく旅の心は落ちつかず、思うように筆も取れない。著作をしても旅を続けられるつもりの私は、かねての約束もその十が一をも果たし得なかつた。「これまで外国に来て、著作をしたという人のためしがない。」と言つて、ある旅行者に笑われたこともある。でも私は国を出るところから思い立っていた著作の一つだけは、どうにかしてそれを書きあげたいと思つたが、とうとう草稿の半ばで筆を投げてしまった。国への通

信を送るぐらいが精いっぱいの仕事であった。それに国との手紙の往復にも多くの日数がかかり世界大戦争の始まってからはことに事情も通じがたいもどかしさに加えて、三年の月日の間には国のほうで起こった不慮な出来事とか種々の故障とかがいつそう旅を困難にした。私も、外国生活の不便はかねて覚悟して行ったよ
うなもの、旅費のことなぞでそう不自由はしないつもりであつた。時には前途の思いに胸がふさがつて、さびしさのあまり寝るよりほかの分ぶんべつ別もなかつたことを覚えている。

過去を振り返つて見ると、今の私がどうにか不自由もせず子供らを養つて行けるといふだけでも、不思議なくらいである。あの子供らの母かあさんの時代のことを思うと、今の借家ずまいでも私

には過ぎたものだ。

「富とみとは、生命よりほかの何物でもない。」

この言葉が私を励ました。

私は旅人のような心で、今までどおりのごくあたりまえな生活を続けたかった。家は私の宿屋で、子供らは私の道づれだ。その日、その日に不自由さえなくば、それでこの世の旅は足りる。私に肝要なものは、余生を保障するような金よりも強い足腰の骨であつた。

大きくなつた子供らと一緒に働くことの新しいよろこび、その考えはどうか男親の手一つで四人のちいさなものを育てて来た私にふさわしく思われた。私は自分の身につけるよりも、今度の

思いがけない収入を延び行く時代のもののほうに向けようと考えようになつた。

私は自分に言つた。

「いっそ、あの金は子供に分けよう。」

二階はひっそりとしていた。私が階下したの四畳半にいて聞くと、時々次郎の話し声がある。末子の笑う声も聞こえて来る。美術書生を兄に持った末子は、肖像の手本としてよくそういうふうに頼まれる。次郎の作画に余念のなかつた時だ。

やがて末子は二階から降りて来た。梯子段はしごだんの下のところ、ちよつと私に笑つて見せた。

「きょうは眠くなっちゃった。」

「春先だからね。」

と、私も笑って、手本で疲れたらしい娘を慰めようとした。

間もなく次郎も一枚の習作を手にして降りて来た。次郎は描いたばかりの妹の肖像を私の部屋へやに持って来て、見やすいところに置いて見せた。

「とうさん。これは、どう。」

「おそろしく鼻の高い娘ができたね。」

「そんなにこの鼻は高く見えるかなあ。」

「冗談だよ。とうさんがふざけて言ったんだよ。そんなことは、どうでもいいじゃないか。どんなものを造り出そうと、お前たち

の勝手だからね。」

画布はまだかわかない。新しい絵の具はぬれたように光る。そこから発散する油の香においも私には楽しかった。次郎は私のそばにいて、しばらくほかの事を忘れたように、じつと自分の画えに見入っていた。

「ほら、お前が田舎いなかから持って来た画えさ。」と、私は言った。

「とうさんなら、あのほうを取るね。やっぱし田舎のほうにいて、さびしい思いをしながらかいた画えは違うね。」

「そうばかりでもない。」

「でも、あの画えには、なんとなく迫って来るものがあるよ。」

私たちが次郎を郷里のほうへ送り出したのは、過ぐる年の秋に

あたる。あの恵那山えなの見える山地のほうから、次郎はかなり土くさい画えを提さげて出て来た。この次郎は、上京したついでに、今しばらく私たちと一緒にいて、春の展覧会を訪たずねたり、旧い友ふるだちを見に行ったりして、田舎いなかの方で新鮮にして来た自分を都会の濃い刺激に試みようとしていた。

まだ私は金を分けることなどを何も子供らに話してない。匂におわしてもない。しかし、私としては、そんな心持ちが自分の内に動いて来たというだけでも、子供らによるこんでもらえるように思まった。目を円まるくしてそれを私から受け取る時の子供らの顔が見えるようにも思まった。私は子に甘いと言われることも忘れ、自分ひとりか一人ぼっちになつて行くことも忘れて、子供らをよろこばせたか

った。

それほど私もきげんのよかつた時だ。私は四畳半から茶の間のほうへ行つて、口さみしい時につまむほどしか残っていない菓子を取り出した。遠く満州の果てから帰国した親戚しんせきのもの置いて行つたみやげの残りだ。ロシアあたりの子供でもよろこびそうなボンボンだ。茶の間には末子が婆ばあやを相手に、針仕事をひろげていた。私はその一つ一つ紙にひねつてあるボンボンを娘に分け、婆やに分け、次郎のいるところへも戻もどつて来て分けた。

「次郎ちゃん、おもしろい言葉があるよ。」と、私は言った。

「田舎いなかへ引つ込むのはね、社会から遠くなるのじゃなくて、自分の虚栄から遠くなるのだ。という言葉があるよ。勉強のできる

のは田舎だね。お前のように田舎にいて、さびしさと戦うのもいい修業じゃないか。」

「しかし、僕はそれに耐えられるほど、まだほんとうに頭ができていない。」

「だから、ときどき出て来るさ。番町の先生の話などもききに来るさ。」

「そうだよ。」

「読めるだけはいろいろなものを読んで見るさ。」

「そうだよ。」

その時になって見ると、太郎はすでに郷里のほうの新しい農家に落ちついて、その年の耕作のしたくを始めかけていたし、次郎

はゆつくり構えながら、持つて生まれた画家の氣質を延ばそうと
していた。三郎はまた三郎で、出足の早い友だち仲間と一緒に、
新派の美術の方面から、都会のプロレタリアの道を踏もうとして
いた。三人が三人、思い思いの方向を執つて、同じ時代を歩もう
としていた。末子は、と見ると、これもすでに学校の第三学年を
終わりかけて、日ごろ好きな裁縫や手芸なぞに残る一学年の生おい
先を競おうとしていた。この四人の兄きょうだい妹まいに、どう金を分けた
ものかということになると、私はその分け方に迷つた。

月の三十日までには約束のものを届ける。特製何部。並製何部。
この印税一割二分。そのうち社預かり第五回配本の分まで三分。

こうした報告が社の会計から、すでに私の手もとへ届くようになった。

私も実は、次郎と三郎とに等分に金を分けることには、すでに腹をきめていた。ただ太郎と末子との分け方をどうしたものか。娘のほうにはいくら薄くしても、長男に厚くしたものか。それとも四人の兄きょうだい妹いもうとに同じように分けてくれたものか。そこまでの腹はまだきまらなかった。

娘のしたくのことを世間普通の親のように考えると、第一に金のかかるのは着物だ。そういうしたくに際限はなかるうが、「娘ひとり一人を結婚させるとなると、どうしても千円の金にかかるよ。」と、かつて旧友の一人が私にその話をして聞かせたこともある。

そこに私はおおよその見当をつけて、そんなに余分な金までも娘のために用意する必要はあるまいかと思つた。太郎は違ふ。かずかずの心に懸^かる^かことがあの子にはある。年若い農夫としての太郎は、過ぐる年の秋の最初の経験では一人で十八俵の米を作つた。自作農として一軒の農家をささえるには、さらに五六俵ほども多く作らせ、麦をも蒔^まかせ、高い米を売つて麦をも食うような方針を執らせなければならぬ。私は太郎の労力を省かせるために、あの子に馬を一匹あてがつた。副業としての養蚕も将来にはあの子を待つていた。それにしても太郎はまだ年も若し、結婚するま^ふでにも至つていない。すくなくも二人もしくは二人半の働き手^{ふたり}を要するのが普通の農家である。それを思うと、いかに言つても太

郎の家では手が足りなかった。私が妹に薄くしてもと考えるのは、その金で兄の手不足を補い、どうかしてあの新しい農家を独立させたかったからで。

言い忘れたが、最初私は太郎に二反七畝^{たんせ}ほどの田をあてがった。そこから十八俵の米が取れた。もつとも、太郎から手紙で書いてよこしたように、これは特別な農作の場合で、毎年の収穫の例にはならない。二度目は、一反九畝九歩^ぶほどの田をあてがった。そうそうは太郎一人の力にも及ぶまいから、このほうはあの子の村の友だちと二人の共同経営とした。地租、肥料、^{もみ}籾などの代を差し引き、労力も二人で持ち寄れば、収穫も二人で分けさせることにしてあった。

いつのまにか私たちの家の狭い庭には、薔薇が最初の黄色い蕾をつけた。馬酔木もさかんな香気を放つようになった。この花が庭に咲くようになってから、私の部屋の障子の外へは毎日のように蜂が訪れて来た。

あかるい光線が部屋の畳の上までさして来ているところで、私はいろいろと思い出してみた。六人ある姉妹の中で、私の子供らの母さんはその三番目にあたるが、まだそのほかにあの母さんの一番上の兄さんという人もあった。函館のお爺さんがこの七人の兄弟の実父にあたる。お爺さんは一代のうちに蔵をいくつも建てたような手堅い商人であったが、総領の子息にはいち

ばん重きを置いたと見えて、長いことかかつて自分で経営した網あみどんや問屋から、店の品物から、取引先の得意までつけてそっくり子息むすこにくれた。ところが子息むすこは、お爺さんじいからもらったものをすっかりなくしてしまった。あの子息むすこの家が倒れて行くのを見た時は、お爺さんは半分狂気のようにであつたと言われている。しまいには、その家屋敷も人手に渡り、子息むすこは勘当も同様になつて、みじめな死を死んで行つた。私はあのお爺さんじいが姉娘に迎えた養子の家のほうに移つて、紙問屋の二階に暮らした時代を知っている。あのお爺さんが、子息むすこの人手に渡した建物を二階の窓の外にながめながら、商人らしいあきらめをもつて晩年を送つていたことを覚えて

ている。

この総領子息むすこに比べたら、三番目の妹娘なぞはいくらも分けてもらわない。あの子供らの母さんも、お爺さんじいのころざしで一生着る物に不自由はしなかった。そればかりでなく、どうかするとお爺さんのころざしは幼い時分の太郎や次郎や三郎のような孫の着る物にまで及んだ。しかし、あの母さんが金で分けてもらって来た話は聞かない。ただ一度、私の前に百円の金を出したことがあつた。私もまだ山の上のわびしい暮らしをしていた時代で、かなり骨の折れる日を送っていたところへ、今の青山の姪めいの父親にあたる私の兄貴あにきから、電報で百円の金の無心を受けた。当時兄貴は台湾たいわんのほうで、よくよく旅で困りもしたろうが、しかもそれが二度目の無心で、私としてはずいぶん無理な立場に立たせら

れた。その時、あの母さんが私の心配しているのを見るに見かねて、日ごろだいにしていた金をそこへ取り出した。これはよくよく夫の困った場合でなければ出すなど言つて、お爺さんじいがくれてよこしたものとかで、母さんが後にその話を私にしてみせたこともある。あの母さんは六人の姉きょうだい妹いの中で、いちばんお爺さんじいの秘蔵娘であつたという。その人ですらそうだ。ああいう場合を想つてみると、娘に薄くしても総領子息むすこに厚くとは、やはり函館のお爺さんなぞの考えたことであつたらしい。あの母さんのように、困った夫の前へ、ありつた金の金を取り出すような場合は別としても、もつと女の生活が経済的にも保障されていたなら、と今になって私も思い当たることがいろいろある。

「娘のしたくは、こんなことでいいのか。」

私も、そこへ気づいた。やはり男の兄きょうだい弟にいに分けられるだけ

のものは、あの末子にも同じように分けようと思ひ直した。私も二万とまとまったものを持つたことのない証拠には、こんなに金かねのことを考えてしまった。やがて、一枚の小切手が約束の三十日より二日ふつかも早く私の手もとへ届いた。私はそれを適当に始末してしまうまでは安心しなかつた。

「次郎ちゃん、きょうはお前と末ちゃんを下町したまちのほうへ連れて行く。自動車を一台頼んで来ておくれ。」

「とうさん、どこへ行くのさ。」

「まあ、とうさんについて来て見ればわかる。きようはお前たちに分けてくれるものがある。」

次郎は、私がめずらしいことを言い出したという顔つきをした。いよいよ私の待つていた日が来た。私は娘にも言った。

「早はや昼ひるで出かけるぜ。お前もしたくをするがいいぜ。」

次郎が町のほうへ自動車を約束しに行つて歸つて来たところに、私も末子も茶の間にて着物をかえるところであつた。出かける時間の都合もあつたので、私は昼飯をいつもより早く済ました上で、と思つた。

「末ちゃん、羽織はおりでも着かえればそれでたくさんなんだよ。きようは用達ようたしに行くんだからね。」

「じゃ、わたしは袴はかまにしましょう。」

私と末子とがしたくをしていると、次郎は朝から仕事着兼帯のような背広服で、自分で着かえる世話もなかったものだから、そこに足を投げ出しながらいろいろなことを言った。

「おい、末ちゃんはそのな袴はかまで行くのかい。」

「そうよ。」

そう答える末子は婆ばあやにまで手伝ってもらわないと、まだ自分ひとりでは幅の広い帯が堅くしめられなかったからで。末子は母さんのこのした古い鏡台の前あたりに立って、黒い袴はかまの紐ひもを結んだが、それが背丈せたけの延びた彼女に似合って見えた。

次郎は私のほうをもながめながら、

「こうして見ると、とうさんの肩の幅はずいぶん広いな。」

「そりや、そうさ。」と私は言った。「ここまでしのいで来たのも、この肩だもの。」

「僕らを四人も背負^{しよ}つて来たか。」

次郎は笑った。

間もなく飯のしたくができた。私たちは婆やのつくつてくれた簡単な食事についた。

「きようは下町のほうへ行つて洋食でもおごつてもらえるのかと思つた。」

そういう次郎はあてがはずれたように、「なあんだ」と、言わないばかりの顔つきであつた。

「用達ようたしに行くんじゃないか。そんな遊びに行くんじゃないよ。へたな洋食などより、もつといい事があるから。」

その時になって、私は初めて分配のことを簡単に二人ふたりの子供に話したが、次郎も末子も半信半疑の顔つきであつた。

自動車は坂の上に待つていた。私たちは、家の前の石段から坂の下の通りへ出、崖がけのように勾配こうばいの急な路みちについてその細い坂を上のぼつた。砂利じやりが敷いてあつてよけいに歩きにくい。私は坂の途中であとから登つて来る娘のほうを振り返つて見て、また路みちを踏んで行つた。こうして親子三人のものが一緒にそろつて出かける

というは、それだけでも私には楽しかった。

「新橋しんばしの手前までやってください。」

と、私は坂の上に待つ運転手に声をかけて、やがて車の上の人となった。肥ふとった末子は私の隣に、やせぎすな次郎は私と差し向かいに腰掛けた。

「きようは用ようたし達だだぜ。次郎ちゃんにも手伝ってもらうぜ。」

「わかつてるよ。」

動いて行く車の上で、私たちは大体の手はずをきめた。

「末ちゃんふろしきは風呂敷ふろしきを忘れて来やしないか。」

と、私が言うのと、末子は車の窓のそばから黒い風呂敷を取り出して見せた。

私たちを載せた車は、震災の当時に焼け残った岡おかの地勢を降りて、まだバラック建ての家屋の多い、ごちやごちやとした広い町のほうへ、一息に走って行つた。町の曲がり角かどで、急に車が停とまるとか、また動き出すとか、何か私たちの乗り心地ごこちを刺激するものがあると、そのたびに次郎と末子とは、兄きょうだい妹いもうとらしい軽い笑えみをかわしていた。次郎が毎日まいにちはく靴くつを買つたという店の前あたりを通り過ぎると、そこはもう新橋の手前だ。ある銀行の前で、私は車を停とめさせた。

しばらく私たちは、大きな金庫の目につくようなバラック風の建物の中に時を送つた。

「現金でお持ちになりますか。それとも御便利なように、何かほ

かの形にして差し上げるようにしましょうか。」

と、その銀行員が尋ねるので、私は例の小切手を現金に換えてもらうことにした。私が支払い口の窓のところ受けた紙幣は、風呂敷包みふうろしきづつにして、次郎と二人ふたりでそれを分けて提さげた。

「こうして見ると、ずいぶん重いね。」

待たせて置いた自動車に移ってから、次郎はそれを妹に言った。「どれ。」

と、妹も手を出して見せた。

私たちの乗る車はさらに日本橋手前の方角を取って、繁華な町の中を走って行った。私は風呂敷包みを解いて、はじめて手にするほどの紙幣の束の中から、あの太郎あてに送金する分だけを別

にしようとした。不慣れな私には、五千円の札を車の上で数えるだけでもちよつと容易でない。その私を見ると、次郎も末子も笑った。やがて次郎は何か思いついたように、やや中腰の姿勢をして、車のゆききや人通りの激しい外の町からこの私をおおい隠すようにした。

私たちはある町を通り過ぎようとした。祭礼かと思まごうばかりにぎやかに飾り立てたある書店の前の広告塔が目につく。私は次郎や末子にそれを指して見せた。

「御覧、競争が始まつてるんだよ。」

あか
紅い旗、紅い暖簾のれんは、車の窓のガラスに映つたり消えたりした。大量生産の機運に促されて、廉価な叢書そうしょの出版計画がそこにも

競うように起こつて来たかと思ひながら、日本橋にほんばし手前のある地方銀行の支店へと急いだ。郷里の山地のほうにいる太郎あてに送金するには、その支店から為替かわせを組んでもらうのが、いちばん簡単でもあり、便利でもあつたからで。日本橋の通りにあるバラック風な建物の中でも、また私たちはしばらく時を送つた。その建物の前にある石の階段をおりたところで、私は連れの次郎や末子を見て言つた。

「さあ、太郎さんへはお金を送つた。これからは次郎ちゃんや三ちゃんの番だ。」

自動車が動くたびに私の子供に話したことがほんとうになつて行つた。「へたな洋食よりいい事がある」と私が誘い出した意味

は、その時になつて次郎にもわかつて来た。私は京橋きょうばしへんま
で車を引き返させて、その町にある銀行の支店で、次郎と三郎
との二人ふたりのために五千円ずつの金を預けた。兄は兄、弟は弟の名
前で。

私は次郎に言った。

「これはいつでも引き出せるというわけには行かない。半年に一
度しかそういう時期は回つて来ない。」

「そこはどうさんに任せるよ。」

私は時計を見た。どこの銀行でも店を閉じるといふ午後三時
までには、まだ時の余裕があつた。私はその日のうちに四人の兄き
ようだい妹いに分けるだけのものは分け、受け取つた金の始末をしてし

まいたいと思つた。そこは人通りの多い町中で、買い物にも都合がいい。末子は家へのみやげにと言つて、町で求めた菓子パンなどを風呂敷ふうろしきづつ包みにしながら、自動車の中に私たちを待つていた。

「末ちゃん、今度はお前の番だよ。」

そう言つて、私は家路に近い町のほうへとまた車をいそがせた。

かなりくたぶれて私は家に帰り着いた。ほとんど一日がかりでその日の用達ようたしに奔走し、受け取つた金の始末もつけ、ようやく自分の部屋へやにくつろいで見ると、肩の荷物をおろしたような疲れが出た。

私は、一緒に帰つて来た次郎と末子を、自分のそばへ呼んだ。

銀行へ預けた金の証書を、そこへ取り出して見せた。

「次郎ちゃん、御覧。これはもうお前たちのものだ。どうこれを役に立てようと、お前たちの勝手だ。これだけあったら、ちよつとフランスあたりへ行つて見て来ることもできようぜ。まあ、一度は世界を見てくるがいい。このお金はそういうことに使うがいい。それまではとうさんのほうに預かつて置いてあげる。」

子供を育てるには、寒く、ひもじく、とある人がかつて私に言つてみせたが、あれは忘れられない言葉として私の記憶に残つてゐる。あまり多くを与え過ぎないように、そうかと言つてなるべく子供らが手足を延ばせるように。私も艱難かんなんに艱難の続いたよ
うな自分の若かった日のことを思い出して、これくらいのはたく

は子供らのためにして置きたいと考えた。父としての私が生活の基調を働くことに置いたのはかなり古いことふるであること、それはあの山の上へ行つて七年も百姓の中に暮らして見たところからであること、金の利息かねで楽に暮らそうと考えるようなことは到底自分ら親子の願いでないこと、そういう話までも私は二人ふたりの子供の前に言い添えた。

その時、末子は兄のそばに静かにいて、例のうつむきがちに私たちの話に耳を傾けたが、自分の証書を開いて見ようとはしなかつた。私はそれを娘の遠慮だとして、

「末ちゃん、お前も御覧。もつと、よく御覧。お前の名前もちやんとそこに書いてあるよ。」

と言つて、その分け前を確かめさせた。

私たちの間には楽しい笑い声が起こつた。次郎は、両手を振りながら、四畳半と茶の間のさかいにある廊下のところを幾度となく往つたり来たりした。

「さあ、おれも成なりきん金だぞ。」

その次郎のふざけた言葉を聞くと、私はあわてて、

「ばか。それだからお前たちはだめだ。」
としかつた。

もはや、私の前には、太郎あてに銀行でつくつて来た為替かわせを送ることと、三郎にもこれを知らせることが残つた。私も、著作に従事するものの癖で、筆執ることが仕事のようになつていて、

手紙となるとひどくおつくうに思われてならない。でも、ほかの手紙でもなかった。私は太郎あてのものをその翌日になって書いた。

送金。

金五千円。

これは思いがけない収入があつて、お前と、次郎と、三郎と、末ちゃんに父さんとうの分ける金です。お前の家でも手の足りないことは、父さんもよく承知しています。父さんはほかに手伝いのしようもないから、お前の耕作を助ける代わりとしてこれを送ります。この金を預けたら毎年三百円ほどの余裕ができましょう。そ

れでお前の農家の経済を補って行くことにしてください。

これはただ金かねで父さんからもらったと考えずに、父さんがお前と一緒に働いているしと考えるてください。くれぐれもこの金をお前の農家に送る父さんの心を忘れないでください。

くわしいことは、いづれ次郎が帰村の日に。

太郎へ

ちようど、そこへ三郎が郊外のほうの話をもつて訪たずねて来た。

「おう、三ちゃんもちようどいいところ来た。お前にも見せるものがある。」

と、私は言つて、この子のためにも同じように用意して置いた

証書を取り出して見せたあとで、

「お前も一度は世界を見て来るがいいよ。」

と言ひ添えた。

「そうしてもらえば、僕もうれしい。」

それが三郎の返事であつた。

何か私は三人の男の子にせんべつ餞別でも出したような気がして、自

分のしたことを笑いたくもあつた。時には、末子が茶の間の外の

あたたかい縁側に出て、風に前髪をなぶらせていることもある。

しろたび白足袋はいた娘らしい足をそこへ投げ出していることがある。そ

れが私の部屋へやから見える。私は自分の考えることをこの子にも

言つて置きたいと思つて、一生他人たよに依るようなこれまでの女の

生しょうがい涯がいのはかないことなどを話し聞かせた。

それにしても、筆執るものとしての私たちに關係の深い出版界が、あの世界の大戦以来順調な道をたどつて来ているとは、私には思えなかつた。その前途も心に懸かつた。どうかすると私の家では、次郎も留守、末子も留守、婆ばあやまでも留守で、住み慣れた屋根の下はまるでからつぽのようになることもある。そういう時にかぎつて、私はいるかいなかわからないほどひっそりと暮らした。私の前には、まだいくらものぞいて見ない老年の世界が待っていた。私はここまで連れて来た四人の子供らのため、何かそれぞれ役に立つ日も来ようと考えて、長い旅の途中の道ばたに、思いがけない収入をそつと残して置いて行こうとした。

青空文庫情報

底本：「嵐 他二編」岩波文庫、岩波書店

1956（昭和31）年3月26日第1刷発行

1969（昭和44）年9月16日第13刷改版発行

1974（昭和49）年12月20日第18刷発行

入力：紅邪鬼

校正：ちはる

2001年2月6日公開

2005年12月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

分配

島崎藤村

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>